

2020 年度 大阪市立大学個別学力検査（後期日程）  
法学部論文「出題の意図」及び「解答例」

第1問

問1 【解答例】

ソフィストにとって重要なのは人間中心主義と相対主義であり、絶対的な真理や善を想定せずに、現に存在するものしか見ない。政治の基準は人間の欲望や快楽であり、良い社会を実現するといったことは目標にはならない。20世紀の科学は、実証科学だけになってしまい、目に見えてわかりやすいものだけが信じられるようになった。21世紀になると、この実証主義の精神はそれ自体が絶対化され、統計数字のようなわかりやすいものだけが信じられ、それが政治を動かすようになった。相対主義の立場からは、他者の説得には論理ではなく数字が必要である。相対主義を徹底すれば、数値目標の改善という成果主義だけが公共的なものになる。科学と政治はこのようにして結びつく。(309字)

問2 【出題の意図】

いわゆる学級民主主義の問題への解決方法の1つとして、筆者は哲学的な真理を求めるような空間の存在をあげる。それは、ギリシャの民主主義や哲学者を知る者にとっては説得力のある解決方法であるが、筆者のいうように、現代社会では少人数での対話や孤独といったものは実現しがたい。子どもの頃からインターネットやスマートフォンに親しんできた年代の受験生に、相当な経験を積んだ識者である筆者の解決方法を批判的に検討させることによって、理解力、想像力、発想力を問う。

第2問

問1 【解答例】

監視をめぐる従来の分析は、国による監視の拡大や、監視する国と監視される市民という対立の構図に注目し、情報監視を市民の自由に対する権利侵害だと批判してきた。あるいは、フーコーの「規律訓練」概念を援用して、公共空間に監視カメラを設置することは市民の自由の侵害ではなく、むしろ規範の自明性を再確認し、それに従わない逸脱者に罰を与え、みずからとおなじ主体に転化させるために必要な措置だとして、人びとによる自発的な監視の拡大が進んだと分析した。しかし、2000年前後の監視社会論は、情報監視の源泉が国や規範にあるのではなく、個人による自由な選択の帰結であること、また、簡便な情報の取得や利得の多い売買のために人びとがみずからの個人情報を提供する状況にあること、さらには、国だけではなく企業や地域住民など監視の担い手が多様化したことを示して、情報監視がもたらす社会的な意義を重視した点で従来の分析の不十分さを明らかにした。(402字)

## 問2 【解答例】

後期近代社会とは、任期制雇用や裁量労働制、離婚率の上昇や同性婚のように、従来は固定的だと信じられてきた労働や家族という基本的な社会的制度や役割が、あくまで個人が望む限りで存続するものだということが明瞭になっているような、社会的な流動性の増大を加速させた社会である。

しかし、個人の選択肢の増大は同時に他者の選択肢の増大でもあり、個人の選択が妥当であるかどうかを決めるために規範の助けを借りることはもはやできず他者の承認によって判断されることになる。もはや何が良く何が悪いという基準が不明瞭ななかで、雇用や愛を維持したいのならば、その都度の承認を得るために他者と交渉し、自己の意義を証明し続けなければならない。そのために、後期近代社会を生きる人びとは、常に不安定な自己を保持し続けることになる。

あらゆるものが流動的な社会において人びとはできる限り、これは確実だと言える事実や証拠を常に探し求める。監視技術による詳細な情報の取得やはっきりとした映像の提示は、こうした事実や証拠を挙げるために有効な手段のひとつであり、そうした私的な個人による不安感が、現代における監視の拡大を駆動させているように思えるからである。(503字)